

錯視の芸術工学

辻村誠一

1. はじめに

環境デザイン研究所の主催で立命館大学心理学部北岡明佳教授の招待講演を企画した。当初は、名古屋市立大学北千種キャンパスでの講演を予定していたが、コロナ禍での対応のため、遠隔（Zoom）での講演とした。

北岡教授は錯視の作者として世界的に著名な研究者であり、その著書や作品も有名である。基礎研究分野においては、錯視がどのような脳機能によって生じるかを調べることは極めて重要である。北岡教授は単に錯視を作品としてつくるだけではなく、錯視が生じるメカニズムを検証しているという点において極めてユニークである。また、このようなアプローチは芸術工学の目標にも合致しており、芸術工学部の学生や教員、もしくは中京地区の視覚科学関連者にも非常に価値のある講演であった。

2. 講演内容

下記に北岡先生招待講演の詳細を示す。

開催日：1月13日13時から17時まで

開催場所：Zoom

活動形式：招待講演・研究集会

参加人数：約 55 名

演題： 錯視の芸術工学

抄録： 錯視は単なる知覚の誤りではない。誤った（とされる）知覚のうち、特定のものが錯視と呼ばれる。特定のものと、美しいものやおもしろいもののことである。このことは、錯視研究の黎明期から研究者の間では暗黙のうちに了解されていたと想像されるが、錯視研究はこころを「客観的」に科学する志向を持つ心理学とともにあったので、「美しい」とか「おもしろい」といった「主観的」な

特性を前面に押し出して錯視を議論するという企画は多くなかったと思われる。これまで、錯視をテーマとする講演において、講演者は、錯視のもつ美的特性やエンターテインメント特性に触れつつも、錯視の現象とメカニズムの推定的话题を中心に喋ってきたが、本講演ではそれらの役割を逆転させてみたい。すなわち、本講演では、錯視のもつ美的特性やエンターテインメント特性およびその実践的応用可能性について論じてみたい。

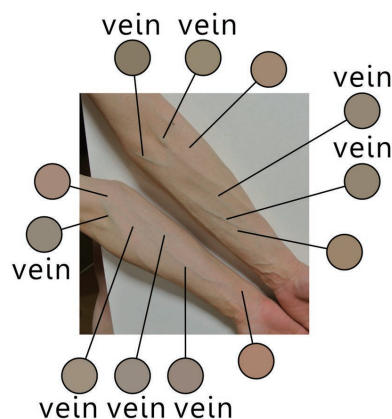


図-1 静脈錯視：腕

図-1は講演でも参照された、腕の「静脈錯視」である。腕の青く浮き出て見える静脈は物理的には青くなく、彩度の低いオレンジ色であることが紹介された。静脈の分光反射特性を測定し、測色学的に「青色」では無いことを言及されていた。その他にも「蛇の回転」錯視や、様々錯視が紹介された。

3. おわりに

今後、芸術工学の分野を先導するためには、芸術はともかく、心理学、工学、物理学等、様々な分野を融合することが重要であることがわかった。

令和3年2月1日